

## 故郷リバプール 身近に感じる港町

ローレンツさんは大学で水彩画などを専攻し、ロンドンを拠点に欧州で創作活動を展開。ロンドンで知り合った妻の喜久子さん(54)の郷里、北アルプスを一望する長野県北部の小川村に94年末、移り住んだ。雄大な山々や真っ白な雪に囲まれ、夢中になって描いたアクリルペイントの風景画は500点にのぼる。

「美しい絵の題材はそろっていた」と長野での生活を振り返る。しかし、いつしか水平線が見える遠い故郷が恋しくなっていた。

「ビートルズを生んだりバブルも、神戸も古くからの港町。「神戸なら、故郷を身近に感じる」ことができそう」と神戸への移住を決め、今年1月、兵庫区の住宅街の一角に自宅兼アトリエを構えた。自宅近くの公園でイーゼルを広げると、地元の人たちが親しく声をかけてくる。震災から立ち直ろうとする力も感じ

## ローレンツさんで 4日から中央区 信州から移住、初個展



須磨の海を描いた「SAKURA SEA」を手にするローレンツさん。神戸市兵庫区の自宅で

# 風景画家 神戸に恋

英国の港町、リバプール出身の風景画家ブライアン・ジーチ・ローレンツさん(51)が、神戸で初めての個展を6月4日から、神戸市中央区山本通1丁目のGALLERY北野坂で開く。「故郷のように、海が見える町で暮らしたい」と今年初め、約8年住んだ信州から神戸に移住。個展では、須磨の桜や淡路島を望む海辺、近所の公園など、目に飛び込む自然の風景を生きたきと描いた作品約50点を披露する。

とこう。

神戸で初めて迎えた春に制作したお気に入りの作品「SAKURA SEA(桜の海)」は、須磨の青い海を背景に美しく咲く桜の花を、なだらかに上る階段とともに描いた。「桜は出会いの季節の花。階段は新しい生活の始まり。空と海は無限の可能性。僕の今の気

持ちと重なる」

欧州をはじめ、創作活動をしながら各地を転々とし、様々な風景を眺めてきたが、「神戸に恋してしまっただけ」に一生腰を据えて描き続けた」と話し、気分はずっかり神戸っ子だ。

6月15日までの午前11時～午後6時(最終日は午後5時まで)。同9日は休館。問い合わせ(午前中または午後7時から同10時まで)はローレンツさん(078・360・6775)へ。